都市を育てるネットワーク型まちづくり活動の展開事例

久　隆浩[1]

[1]正会員　近畿大学教授　総合社会学部環境系専攻(〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1)
E-mail: hisa@socio.kindai.ac.jp

本研究では、ネットワーク型で展開するまちづくり活動を取り上げ、従来の階層組織型の活動との違いを分析しつつ、都市の養育(urban husbandry)としてのネットワーク型活動の可能性について考察を行う。自治会活動をはじめとした地域活動の多くは、階層組織型活動として展開されてきた。地域住民が自治会活動から離れていくのは、役員を中心に意志決定を行い、動員をかけて動かすやり方が時代に合わなくなっているからだと考えられる。一方、若者や女性が展開する新たな活動は、情報交換を行いながらネットワークでつながっている。こうしたネットワーク型活動が広がることによってより多くの人に活動に参加してもらうことができる。ネットワーク型のまちづくり活動は、できるところから無理なく始めて、少しずつ大きくしていく。こうした地道な活動の積み重ねがまちを変えていく。

***Key Words**: community development, urban husbandry, network-based activity, hierarchical organization*

1．ネットワーク型活動と階層組織型活動

市民活動や地域活動の動き方には、ネットワーク型活動と階層組織型活動がある。それぞれの特徴は表-1 のように整理することができる。階層組織は、その名の通り構成員の間に上下関係が存在する。そして、意思決定は上層部でなされ、その決定が指示・命令という形で下に下ろされ、一丸となって動くのが階層組織型の動き方である。一方、ネットワークでは構成員に上下がなく、水平につながっている。意思決定は構成員同士が話合い、参加型で決定していく。また、組織全体で意思決定せず、気の合う有志で動くこともある。こうした動き方をするネットワークでは、構成員ができること、やりたいことを自発的に行い、それらがつながって活動が展開されていく。

自治会活動をはじめとした地域活動の多くは、階層組織型活動として展開されてきた。地域住民が自治会活動から離れていくのは、役員を中心に意志決定を行い、動員をかけて動かすやり方が時代に合わなくなっているからではないだろうか。とくに若者にとっては馴染めないものとなっていると思われる。一方で、NPO をはじめとするテーマ型活動に参加する人が多くなっている。自らの興味・関心に合わせて楽しく活動できる、そんな活動に魅力を感じ、参加する人が増加しているといえる。

このように、階層組織型活動とネットワーク型活動では、活動の担い方が根本的に異なっている。ここで誤解のないようにしておくが、すべての活動をネットワーク型に置き換えていこうと言うわけではない。階層組織型

表-1　階層組織型とネットワーク型の活動の違い

	階層組織型	ネットワーク型
構成員の関係性	上下関係	水平関係
意思決定	上層部で決定	みんなで考える（意思決定がないときも）
活動形態	指示・命令で一丸となって動く	自発的に、できること／やりたいことを行う
	やらねばならないことを使命感で	やりたいことを楽しく
秩序形成	管理	自律
核となる人	リーダー	ファシリテーター
即効性・持続性	即効性 : 高　持続性 : 低	即効性 : 低　持続性 : 高

やネットワーク型それぞれに特徴があるので、それらを見極めふさわしい形態で活動展開していく必要がある。たとえば、階層組織型活動では、やらねばならないことを使命感で行っていくことができる。一方、ネットワーク型活動は、構成員がやりたいことを楽しく行うことができる。また、組織や活動の秩序を形成するために、階層組織は上層部が管理を行うが、ネットワークは管理を行うことができない。そこで構成員の自律が求められる。

こうした活動展開のタイプの違いに応じて、それを担う人材像も異なってくる。従来、組織を率いるためには優秀なリーダーが重要であると言われてきた。これは今も、そしてこれからも重要である。リーダーとはその名の通り、リードする、つまり前にたって引っ張っていく人である。これに対し、ネットワーク活動ではファシリテーターが重要となる。

さらに、組織型の特長は効率よく活動ができることである。また、ネットワーク型は個々人の自律性を大切にした活動展開が行える。短時間での解決が必要な課題に対しては組織型の対応がふさわしいが、長期間の取り組みが必要な場合には自律性を基盤にしたネットワーク型の活動が有効である。

２．大和郡山のまちづくり

まちづくりの成功には「よそ者」「若者」「ばか者」が必要であると言われる。これらの人々は過去のやり方やしがらみに縛られない人間ということができる。「よそ者」は地域の外の人間であるから、地域のしがらみに囚われない発想や行動ができる。「若者」も経験が浅い分、過去に縛られることが少ない。また「ばか者」も地域のしがらみにこだわらず行動できる人間である。このように、従来の常識にとらわれずに行動できる人が、まちづくりのキーパーソンになることができる。

そもそも「常識」「非常識」とは何かを改めて考えてみると、まちづくりのヒントが見つかる。「常識」は「正しい」もの、「非常識」は「おかしい」ものと思いがちであるが、じつはそうではない。『大辞林』によると、常識は「ある社会で、人々の間に広く承認され、当然もっているはずの知識や判断力」のことである。この定義の「ある社会で」という言葉が示すように、常識は「ある社会で」という限定付きのものである。地域が変われば常識が違うこともあるし、同じ地域でも時代によって常識は変わってくる。また、「人々の間に広く承認され」という言葉が示すように、多くの人が承認したものが常識と呼ばれる。

従来は階層組織型活動が多かったが、これからは常識にとらわれない人々がネットワークでつながっていくネットワーク型活動が重要だと言える。

こうしたまちづくりの典型例として、大和郡山のまちづくりを見ていきたい。ネットワークを形成するには情報交換の場が必要であるが、こうした場として筆者らは各地で「まちづくり井戸端会議」をつくってきた。大和郡山にも「にぎわっ茶会」と名付けられた月に一度の井戸端会議があり、ここに集まった人々が、次々に行事を展開している。大和郡山のメンバーは、20 歳代、30 歳代の若者が核になっている点も注目すべきところである。その核になっているのが NPO 法人 K-Pool Project である。大和郡山は金魚の養殖で有名であるが、K-Pool は金魚の養殖池から取った名称である。

大和郡山のまちづくりが元気になった契機がいくつかあるが、その第一は映画「茜色の約束」の制作である。大和郡山出身の塩崎祥平監督が、地元を舞台に撮影したこの映画の制作を契機に K-Pool Project が立ち上がった。また、市が買い取った旧川本家住宅の活用ももうひとつのきっかけとなった。元遊郭のこの建物は木造三階建ての歴史的建造物であるが、耐震性の問題で活用ができていなかった。しかし、何とか活用できないかということで、事故に対しては利用者の自己責任でというかたちで活用がはじまった。数年放置されていたので室内はほこりだらけであったので、まずは室内の清掃をということで、当時大学生であった伊藤哲史氏を中心に「お掃除大作戦」と名付けた一斉清掃がボランティアで実施された。そこに参加した京都造形芸術大学の学生達が「私たちにもできることはないか」ということで動きだし、「金魚隊」というグループを組んで「テレ金」というアート作品を制作する。公衆電話ボックスを金魚鉢にするというユニークな作品で、郡山だけでなく中之島公園でも展示されたことがある。

こうした旧川本家住宅の活用が動き出すと、ここを拠点にさまざまなイベントが動き出す。そのひとつが HANARART である。奈良県内各地で町家に現代アートを展示するこのイベントの会場のひとつに旧川本家住宅が使用された。また、このイベントに訪れる人にもっと楽しんでもらおうということで「箱本食べまぁる」というイベントも企画・実施された。いわゆるまちなかバル形式のイベントであるが、数人の人間が足で稼ぎながらの参加店募集で実施されたものである。8 月は恒例の金魚すくい選手権開催にあわせて、手作りの「金魚ねぶた」を軒先につるすイベントも行われるようになった。こうした手作りの楽しいイベントを若手が中心に次々に動かしているのが現在の大和郡山のまちづくりである。

しっかりした意思決定にもとづいた活動展開ではなく、できる人がつながりあって楽しく活動が行われる、こうした活動展開こそがこれからの時代に求められるネットワーク型の活動なのである。

３．平野郷のまちづくり

また、大阪市平野郷のまちづくりもネットワーク型に位置づけることができる。戦国時代に外敵を防ぐため堀と土居を張り巡らせた環濠集落を形成した平野郷は、現在も多くの町家が残り歴史的まちなみを有している。このまちなみを守る活動を続けている「平野のまちづくりを考える会」はネットワーク型で活動を担っている。

「平野のまちづくりを考える会」は会という名称を用いているが、そこには会長が存在しない。また、会則もなく、会費の徴収も行っていない。にも関わらず、全国的にも有名なまちづくり活動が展開されているのである。その要諦は「ほろ酔いサロン」と呼んでいる月 1 回の集まりにある。月 1 回集会所である「おも路地」に集まり、酒を酌み交わしながら歓談をする。そこでいろいろな提案がなされ、参加者がおもしろがれば提案者を核にして活動が展開される。提案者は地域外の人でもよく、実際に地域外の大学生の提案が契機となって実現したイベントもある。

まちづくりを考える会が大切にしている原則はいくつかあるが、そのひとつに「おもしろいことをいい加減にやる」ということがある。まずは、自分がおもしろいと思うことに取り組むことが大事であるという指摘である。また、「いい加減」というのはちゃらんぽらんという意味ではなく、「良い加減」ということである。いい湯加減と同様の「いい加減」という意味である。

まちづくりを考える会では「自分たちが本当に興味を持って取り組めるテーマを厳選し、ひとりひとりが持続可能なエネルギー配分で取り組めるようお互いが心掛ける」と表現している。自発性を大切にし、共感によって仲間を広げていく、まさしくネットワーク型の典型的な活動展開といえる。また、「ひとりひとりが持続可能なエネルギー配分で取り組めるようお互いが心掛ける」というフレーズは、「自分のものさしで相手を測らない」というボランティア活動の原則にもあてはまる。「自分はこれだけがんばっているのに、あなたは年に 2 回しか活動しないの」ということは言ってはならない。それぞれの人には各人の都合やペースがあるから、それをお互い尊重しながら協働していくことがボランティア活動である。

さらに、会の原則には「様々な背景を有する人々が個人の資格で緩やかに連帯する」というものがある。グループの代表者が集うのではなく、参加は個人の資格で、そして緩やかにつながっていく、これもネットワーク型の特徴である。「時間はかかるかもしれないが、ひとりひとりが本当に自分の気持ちからまちづくりに参加し続けられるような下地を育んでゆこう、というのが会の活動の核心的な部分」と述べている。

４．仲間から全国に広がる市民活動

近年、若い主婦層の活動が地域を活性化しているが、彼女たちの活動もネットワーク型で展開されることが多い。その典型が奈良県生駒市在住の樽井雅美さんである。樽井さんの現在の肩書きは「特定非営利活動法人日本ワンディッシュエイド協会副理事長」であり「スイーツビジョン」リーダー（代表）である。ワンディッシュエイド協会は、陶磁器食器のリユースを推進するために各地でリサイクル市を開催している。

樽井さんはスウィーツ好きで、関西各地のスウィーツを食べ歩き、それをブログに紹介していた。ブログの読者も多く、いわゆるブロガーのはしりであった。スウィーツの中には陶磁器のカップに入ったものもあって、気がつけば自宅にカップがたくさん残っていた。これをゴミとして捨てるのはもったいないと思った樽井さんは、生駒市役所に陶磁器のリサイクルを扱っていないか相談に行く。しかし、答えはノーであった。困った彼女は、インターネットで検索し、岐阜県多治見市で陶磁器のリサイクルを扱ってくれる事業者を見つける。自宅にあった陶磁器のカップだけ持っていくのはもったいないと、近所の人が自宅に残った食器を入れてくれるよう、自宅前に段ボール箱を置いたところ、たくさんの食器が集まった。これらを自家用車に積んで自ら多治見まで運んでいったのだが、車いっぱいに積まれた食器の重量は相当なものであり、カーブでは車のハンドルをとられながらひやひや運転でどうにか事業所に持ち込むことができた。

「こんなたいへんなことは続かない」と思った樽井さんは、食器のリユースを思いつく。きれいな食器は、持ち寄り、交換することができれば、捨てなくて済むということである。近所の主婦仲間 5 人から始まった小さな動きはどんどん大きくなり、ついに生駒市役所も動かすようになる。さらに全国の仲間がつながり日本ワンディッシュエイド協会に発展したのである。

そうこうしているうちに東日本大震災が起こる。そのとき樽井さんも「私にできる支援はないか」と考えた。「私は陶磁器食器のリユース活動をしているけれど、最初の出発はスウィーツ好きが昂じてということだったはず。もう一度原点に立ち戻って、好きなスウィーツで復興支援ができないだろうか」との思いで立ち上げたのが「スイーツビジョン」である。「東日本大震災復興支援スイーツプロジェクト」と名付け、関西のパティシエに協力を仰いだところ、6 名のパティシエの協力を得ることができた。パティシエがレシピを開発した CocCacao というチョコレートは、1 個買うごとに 30 円が復興支援に回るしくみになっている。

ブログを書いていた頃に多くのパティシエと知り合いになっていただけでなく、リユースできるカップを自己

資金を使って開発し、パティスリー（洋菓子店）に使用をお願いしたこともあって、有名なパティシエと友好関係ができあがっていた。それが今回のプロジェクトにつながったのである。樽井さんは将来的には石巻に工場をつくり、スウィーツを現地生産することで地元雇用につなげたいという希望を持っている。

５．ひとりから始まる名物料理づくり

「吹田名物すいたまん塾」代表の田中俊子さんの活動もネットワーク型に位置づけることができる。吹田生まれ、吹田育ちで食べ物好きの田中さんは、自らの手で吹田の名物料理がつくりたいと立ち上げたのが「すいたまん塾」である。吹田市が応募した「まちづくり市民塾」のプロジェクト募集に手を挙げてこのプロジェクトは始まった。出身地の吹田市を食で元気にしよう、ということで、伝統野菜である「吹田クワイ」や本社が吹田市にある「マロニー」といった吹田の名産品を皮で包み、蒸して饅頭をつくる、これが「すいたまん」である。公民館ですいたまんづくりの講座を開催したり、イベントですいたまんを売る屋台を出店したり、といった活動を展開している。

「すいたまん」から始まった田中さんの活動は、食をテーマに次々と発展している。たとえば「こども寿司・鯖味庵（サバビアン）」。鯖寿司職人から鯖寿司づくりを学び、それを販売することで子どもたちに職業体験をさせるイベントである。また、「こども昔体験授業」での「むかしごはん」づくり。吹田市の南高浜町にある吹田歴史文化まちづくりセンターは、江戸時代末期の庄屋屋敷を再生したものだが、そこにあるかまどを使ってご飯を炊く。かまどの火は火打石でつけるほどのこだわり。おかずは夏野菜のすいとん汁と七輪で焙ったメザシ、それにきゅうりの塩もみといったシンプルなものである。「屋台飯交流会」というのもある。これは、留学生たちに地元の屋台料理をつくってもらう、食を通した国際交流のイベントである。

じつは、先ほどの樽井さんと同じように田中さんも東北の支援をやっている。たとえば、B1 グランプリでも有名になった「石巻焼きそば」や「なみえ焼きそば」づくり。焼きそばを焼いて食べることで東北に想いを馳せようというイベントである。彼女がユニークなのは、これら焼きそばの焼き方を教えてもらうために、自家用車を駆って浪江や石巻まで行ってしまうところにある。とにかくフットワークが軽いし、ネットワークを使って次々とイベントを実行している。先日も「おはぎ茶屋」というイベントでは子どもたち 20 名を集めて 400 個のおはぎを一気につくってしまった。こうした田中さんのネットワークは、「北千里地域交流研究会」が縁でつくられたものも少なくない。まちづくり井戸端会議を有効活用してネットワークにつなげているといえる。

６．まとめ

以上見てきたネットワーク型のまちづくり活動は、スタートは小さなものであるが、それが徐々に仲間を巻き込み大きなものとなっている。できるところから無理なく始めて、少しずつ大きくしていく。そして一つずつ着実に実現していく。こうした地道な活動の積み重ねがまちを変えていく。ロバータ・B・グラッツは『都市再生』の中で「都市の養育の基本原理は、ゆるやかで自然な、過激でない変化、本当の社会的、経済的要求に応えるような変化である。多くの参加者が少しずつ力を出し、小さな変化から大きな違いを作っていくとき都市はもっとも確実に応える」と述べているが、紹介した事例はまさしく「都市の養育」を行っているといえる。

CASE OF NETWORK-BASED COMMUNITY DEVELOPMENT ACTIVITIES AS URBAN HUSBANDRY

Takahiro HISA

In this study, we picked up the community development activities carried out by network type, while to analyze the differences between the activities of the hierarchical organization type, carry out the discussion about the possibility of the network type activities as urban husbandry. Many of the regional activities to be typical of residents' association activity, have been developed as a hierarchical organization type activities. Tendency to local residents away from the residents' association activities, it will be due to the fact that activity method does not fit the era. On the other hand, new activities that young people and women are deployed, are connected by a network while performing the information exchange. It is possible to get to participate in activities to more people by network type activities spread. Activities of network type, starting without difficulty from where it can be, is increased little by little. Stacking of these steady activity is going to change the city.